

ペテロの失敗を教訓とする

ヨハネ福音書18章12-27節

【新改訳 2017】

- 18:12 一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、
- 18:13 まずアンナスのところに連れて行った。彼が、その年の大祭司であったカヤパのしゅうとだったからである。
- 18:14 カヤパは、一人の人が民に代わって死ぬほうが得策である、とユダヤ人に助言した人である。
- 18:15 シモン・ペテロともう一人の弟子はイエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の家の中庭に入ったが、
- 18:16 ペテロは外で門のところ立っていた。それで、大祭司の知り合いだったもう一人の弟子が出て来て、門番の女に話し、ペテロを中に入れた。
- 18:17 すると、門番をしていた召使いの女がペテロに、「あなたも、あの人の弟子ではないでしょうね」と言った。ペテロは「違う」と言った。
- 18:18 しもべたちや下役たちは、寒かったので炭火を起こし、立って暖まっていた。ペテロも彼らと一緒に立って暖まっていた。
- 18:19 大祭司はイエスに、弟子たちのことや教えについて尋問した。
- 18:20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に対して公然と話しました。いつでも、ユダヤ人がみな集まる会堂や宮で教えました。何も隠れて話してはいません。
- 18:21 なぜ、わたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、それを聞いた人たちに尋ねなさい。その人たちなら、わたしが話したことを知っています。」
- 18:22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた下役の一人が、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。
- 18:23 イエスは彼に答えられた。「わたしの言ったことが悪いのなら、悪いという証拠を示しなさい。正しいのなら、なぜ、わたしを打つのですか。」
- 18:24 アンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カヤパのところに送った。
- 18:25 さて、シモン・ペテロは立ったまま暖まっていた。すると、人々は彼に「あなたもあの人の弟子ではないだろうね」と言った。ペテロは否定して、「弟子ではない」と言った。
- 18:26 大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切り落とされた人の親類が言った。「あなたが園であの人と一緒にいるのを見たと思うが。」
- 18:27 ペテロは再び否定した。すると、すぐに鶏が鳴いた。

【祈りながら考えよう】

- 第1回目から第3回目までのペテロの否認は、それぞれだれに対してですか。
- ペテロが3回も主を否認するという失敗した原因はどこにありますか。
- 3回目の否認の後、ペテロはどのような行動を取りましたか。その結果はどうなりましたか。

【解 説】

（1）アンナスのところへ

一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえると、まずアンナスのところに連れて行った。なぜか。彼がその年の大祭司カヤパのしゅうとだったからである。彼自身も以前大祭司であったが（6-15年）、今は引退しており、代わって娘婿のカヤパが大祭司になっていたこともあって、まだ相当の影響力をもっていた。いわば陰の実力者だった。それで、彼らはまずアンナスのところに連れて行き、そこで不当な裁判が持たれた。

その後、現大祭司のカヤパのもとに連れて行かれるが、ヨハネはここでそのカヤパを紹介するにあたり、彼が以前ユダヤ人に助言した言葉をもう一度引用している。14節「カヤパは、一人の人が民に代わって死ぬ方が得策である、とユダヤ人に助言した人である。」

ヨハネはなぜこの言葉を引用したのか。それは、カヤパが自分たちの利益のみを考えて語った言葉が、はからずもそれがイエス・キリストの身代わりの死を予告していたからである。だから、ヨハネは再びそれを引用することによって、イエスの身代わりの死がいよいよ始まろうとしていたことを示そうとした。

（2）一回目の否定

「もうひとりの弟子」とはヨハネのことである。ヨハネが大祭司と「知り合い」であるお陰でヨハネは許可を得て、中庭に入った。ヨハネが出て行って、門番をしている女と話して初めて、「ペテロ」は入ることを許された。

門番をしていた召使いの女が、いきなりペテロにこう言った。「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね」突然の質問に、それで冷静さを装いながら、「違う」と言った。辺りは薄暗かったので互いの顔もはっきり見えない状態だったこともあって、何とかその場を切り抜けることかできた。彼はイエス様に「あなたのためなら、いのちも捨てます」と言った人である。

「あなたのためなら、いのちも捨てます」と言ったあの言葉はいったい何だったのか。人間的な強がりとか意志というものは、ほんとうに弱い。いざとなると、自分を守ることしか考えられない。

（3）予備尋問

場面がイエスの裁判に移っている。場所は同じ大祭司の中庭である。ここに出てくる大祭司はアンナスのこと。これは実際の裁判ではなく、実際の裁判が行われ前の予備尋問のようなもの。最初からイエスを有罪と決めつけての尋問だから、訴訟手続きそのものに問題がある。彼はどんなことを尋問したか。

彼はイエスに弟子たちについて、また、その教えについて尋問した。弟子たちについて尋問したのは、ローマ帝国に対する反逆罪で弟子たち全員を総督ピラトに告発するためだったであろう。また、イエスの教えについて尋問したのは、その教えが神を冒瀆するものであることを暴き、冒瀆罪で立証するためであった。

それに対してイエス様は何と答えられたか。イエス様は弟子たちに関しては沈黙されたが、その教えに関しては、それは公然となされたのだから、それを聞いた人たちに尋ねなさい、と言われた。そして、もし何か問題があるなら、その人たちに聞くべきだというのである。というのは、律法には何とあるか。律法には、裁判において証言するのは本人ではなく、二人か三人の証言者によるとある。

すると、そばに立っていた下役の一人が、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言って、平手でイエスを打った。最初に神の子に手を出したのは、正義を行うはずの下役たち、ユダヤ教の神殿警備隊の者であった。恐れ多くも全地の主、神の子イエスを平手で打った。

大祭司は、神と人を取りなすのために、人間の大祭司が一時的に立てられていたが、その大祭司の権威を認め、その権威を尊重することはとても大切なことであった。だから、この下役が取った態度は間違いではない。彼の過ちは、自分の目の前にいるお方が真の大祭司であったということを知らなかったことである。もしもこの役人の霊的な目が開かれていたなら、彼は即座にキリストの足元にひれ伏して礼拝したに違いない。

（4）二回目・三回目の否定

場面が再び大祭司の中庭にいたシモン・ペテロに戻る。そこはイエス様が顔につばきをかけられ、殴りつけられていたところであるが、一方ペテロは暖まっていた。イエス様が苦しめられている間、彼はずっと敵の火で暖まっていた。すると人々が彼にこう言った。「あなたもあの人の弟子ではないだろうね。」(25)

マタイの福音書を見ると、彼らがそのように言ったのは、彼のことばになまりがあったからだである。彼らは「確かに、あなたもあの人の仲間で。ことばのなまりで分かる。」(26:73)と言った。ペテロはガリラヤ出身だったから、そのことばのなまりでわかる。するとペテロは否定して、「弟子ではない」と言った。二回目である。今回は以前よりも否定する度合いが強くなっている。一回目は、「違う」だけだったが、今回は「弟子ではない」とはっきりと否定した。三回目はどうか。

26節。今度は大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切り落とされた人の親類が言った。「あなたが園であの人と一緒にいるのを見たと思うが。」大祭司のしもべの一人で、ペテロに耳を切り落とされた人とはマルコスである。

ペテロは何と答えたか。27節、「ペテロは再び否定した。」

イエス様はこのことを知っていた。だから、最後の晩餐の時ペテロが「あなたのためなら、いのちも捨てます。」と言ったとき、こう言われた。「わたしのために命を捨てるのですか。まことに、まことに、あなたに言います。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」(13:38)

その御言葉の通りになった。ペテロは鶏が鳴いた時、この言葉を思い出した。ルカの福音書を見ると、この時イエス様が振り向いてペテロを見つめられたとある(ルカ22:61)。目と目が合った。そして彼は、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」とイエス様が言われたことばを思い出して、外に出て、激しく泣いた(ルカ22:62)。

ペテロは、以前は自分自身にとっても自信のある人。行動的なタイプの人。イエス様を愛して、本当にいのちをかけて最後まで従おうと思っていた。他の弟子たちが躓いても、自分だけは絶対にそんなことはないと思っていた。そのように思っていた彼が今、そうでないということに気付かされ、完全に打ちのめされてしまった。完全に砕かれた。イエス様はそのことを知っておられた。人間の強さというものがどれほど弱く、脆いものであるかということ。だから、ペテロのためにとりなしの祈りをされた。ルカ22:31-32である。

「シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを妻のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

ペテロは失敗したが、彼の信仰は無くならなかった。なぜか。イエス様が彼のために祈られたからである。彼はのろいまでかけて誓いイエス様を否定したが、それでも信仰が無くならなかった。そして、初代教会の指導者として立ててくださった。

ペテロの信仰は完全ではなかったが、主が彼のために祈り、赦し、癒し、励まし、立ち上がらせてくださったので彼は神の器として用いられ、神の御言葉を通して多くの人々を救いに導き励ますことができたのである。

それは私たちも同じである。もしかすると、あなたは自分にはできないことはない、自分には何でもできると思っているかもしれない。自分にはそれだけの意志と力があると。しかし、自分自身に自信がある時には神の働きをすることはできない。神の働きは、自分が簡単に失敗し躓いてしまうような弱者であることをとことん知り、神の前に砕かれ、自分の人生を主イエス様に明け渡した時に始まる。